

〔研究ノート〕

瀬戸と名古屋の文化・観光資源

古池 嘉和

名古屋学院大学現代社会学部

要 旨

本稿は、近代化における瀬戸と名古屋の関係を踏まえた上で、両地域での文化資源ストックを活かした産業観光の今後を考える手がかりとして、両市における現有の文化資源の分類整理を行うものである。近代化の過程で輸出された陶磁器産業に伴って生まれた諸資源を「文化・観光資源」として整理／再評価することで、失われつつあった両市の文化的な相互交流を促進し、瀬戸市にとっては陶磁器産業の活性化に、名古屋市においては生活の質を高める契機になるような関係の構築を理想像として描いている。本稿は、その手はじめとして、陶磁器（産業）に関連する文化・観光資源（陶磁器の展示施設（美術館、博物館等）、生産者組合に関連する建造物、教育施設・試験研究機関、文化の伝承・活用における新たな組織など）を分類整理し、それらを踏まえて広域交流や産業観光を展望したものである。

キーワード：近代化、輸出陶磁器、産業観光、文化・観光資源、相互交流

Resources of culture and tourism in the Seto and Nagoya area

Yoshikazu KOIKE

Faculty of Contemporary Social Studies
Nagoya Gakuin University

* 本稿は、2016年度COC事業（地域志向型研究教育経費）の助成を受けた成果の一部である。

発行日 2017年12月31日

はじめに

本稿では、近代化の流れの中で、瀬戸と名古屋の関係を踏まえた上で、両地域での文化資源ストックを活かした産業観光の今後を考える手がかりとして、両市における現有の文化資源の分類整理と、その評価を行うことを目的とする。両市の関係は、今日では、陶磁器に関する生産や流通面でのつながりは希薄化する一方、瀬戸市で住宅都市の機能が強くなるに伴って、名古屋市内への通勤・通学という一方通行の関係になっている。

だが、これまで輸出陶磁器産業の振興に伴って生まれた諸資源を、「文化・観光資源」として再評価することで、失われつつあった両市の相互交流を促進し、瀬戸市にとっては陶磁器産業の活性化に、また、名古屋市においては生活の質を高め、暮らしの文化を彩る契機になるような関係性が生まれることを、将来的な理想像として描くことができるだろう。そこで、本稿では、その手ははじめとして、主に近代輸出陶磁器産業によって生まれた文化資源を分類整理し、広域交流や産業観光の面から評価していくこととする。

1. 瀬戸と名古屋の関係—近代以降

瀬戸は、1300年を超えとも言われるほど古くからやきものづくりを行ってきた。元々、「陶器」を生産していたが、江戸時代の後期になると「磁器」生産が始まり、陶磁器産地として活況を呈するようになる。ここは、良質な原材料（木節粘土／蛙目粘土）が産出され、原料から成型、絵付け、仕上げ、検品／梱包などを一貫して行える産地であった。そのため芸術性の強い一品物の制作から、日用品として機械生産の量産品製造まで、実に幅広い品目の制作／製造が可能な産地を形成していった。

明治期の後半になると、焼成や製土、成形などの分業化が進み、隣接する名古屋との間にも広域的な分業関係が生まれてくるようになった。同時に、市場は海外にも拡大し、陶磁器産業は輸出産業としての性格を強めていく。その際、重要な貿易輸出港となる名古屋港が1907年に開港し、以後、陶磁器が同港における主要な輸出品目となっていく。

このようにして、陶磁器が近代産業として成熟していく過程で、名古屋では瀬戸との分業関係が構築されていくこととなるが、その際、機能が集積したのは東区や北区界限であった¹⁾。そして、瀬戸／美濃という伝統的な陶磁器産地と名古屋を含めた広域的な分業体制が構築され、「名古屋絵付」と呼ばれる独自の技法も生まれるようになる。

しかし、その関係性は、1985年の「プラザ合意」後の円高局面で、大きく変わる事となる。海外市場における日本製陶磁器の比較優位性の低下により輸出額が減少した結果、瀬戸と名古屋の関係性も大きく変化していく。今日では、名古屋の生産・流通機能が低下し、産業を通じた結びつきは弱くなった。一方で、瀬戸は、名古屋都市圏の郊外型住宅都市としての性格が強まり、名古屋への通勤・通学者が増加した。だが、固有の文化を有する都市間の交流のあり方としては、一方に従属するのではなく相互交流が望ましい。そのことによって、陶磁器産業は再び創造的な

機能を回復し、生産（創造）、流通、消費に至る好循環を生み出していくことが可能になると思われる。

2. 名古屋市と瀬戸市²⁾において現存する文化資源

名古屋市及び瀬戸市における陶磁器関連の文化資源は、多種多様に存在する。そもそも文化資源とは何かという点も曖昧であるが、文化資源学会³⁾によれば、「ある時代の社会と文化を知るための手がかりとなる貴重な資料の総体」であるとしており、それらは文化資料体とも呼ばれている。同学会では、その例示として、「博物館や資料館に収めきれない建物や都市の景観、あるいは伝統的な芸能や祭礼など有形無形のものを含む」としている。

瀬戸市は、日本を代表する「六古窯」でもあり、長い歴史を有している。従って、各時代の社会と文化を知る手がかりとなる文化資料体は、豊富に存在する。そのため「ある時代」を、主として近代産業として名古屋との関係が生まれた時代、すなわち近代を中心に、有形／無形の文化資源を整理した。

有形資源の代表的なものとしては建造物等の文化資源が、また、無形の文化資源としては職人や技などの人的資源を上げることができる。もちろん文化資料としては、近代産業に至る陶磁器産業に関連する組合に残されている「資料」など貴重なものもあるが、ここでは、産業観光につながるような文化資源を「文化・観光資源」と定義づけ、それに絞って整理することとした。

2.1 有形の文化・観光資源

建造物など有形の文化・観光資源として、以下のようなものが確認できる。

(1) 陶磁器の展示施設（美術館、博物館等）

表1 名古屋市における展示施設（例）

No.	施設名	展示内容など
1	ノリタケの森	ノリタケミュージアム（ノリタケの森3・4階）明治から昭和初期までに製造されたノリタケ製品を展示（「オールドノリタケ」や「画帖（がじょう・デザイン画）」をはじめ、数々のテーブルウエアなど）。
		クラフトセンター（ボンチャイナ製造工場）（ノリタケの森 1階・2階）生地の製造から絵付けまで、ノリタケの技と伝統を間近で見学できる施設。（参考HP： www.noritake.co.jp/mori ）
2	横山美術館	明治・大正時代に制作された輸出陶磁器を、里帰り品を中心に展示。名古屋周辺で制作された輸出用陶磁器、日本初の洋風陶磁器であるオールドノリタケ、まとまった作品群を目にする機会が少ない墨田焼きなど。（参考HP： www.yokoyama-art-museum.or.jp/about ）
3	名古屋市博物館	「常設展 尾張の歴史」【窯業】5-1 古代の窯業 尾張で初めて生産された灰釉陶器等。5-2 中世の窯業 鎌倉時代、新たに中国製の陶磁器をまねた高級な施釉陶器を焼く瀬戸・美濃窯生産品等。（参考HP： www.museum.city.nagoya.jp ）

4	日陶連美術館	日本陶磁器センター 4階小展示室「常設展」昭和初期の工芸技術作品をおおよそ40点前後、作者別に常設展示。季節により展示替えを行う。全424点所蔵。(参考HP： www.toujiki.org/nittoren.art-museum.html)
---	--------	--

表2 瀬戸市における展示施設(例)

No.	施設名	展示内容など
1	瀬戸市美術館(瀬戸市文化センター内)	陶磁器、絵画、彫刻等美術作品全般の展示。常設展のほか、地元作家を中心とする様々な企画展を開催。収蔵品は瀬戸市にゆかりの深い作家を中心に陶芸・絵画・彫刻等約1000点。(参考HP： www.seto-cul.jp/seto-museum)
2	瀬戸蔵ミュージアム(瀬戸蔵内 2・3階)	瀬戸の伝統産業であるやきものづくりを核に瀬戸の特徴的な建物のジオラマ復元や窯業関連道具の展示、瀬戸焼の歩みなどを紹介するとともに、多様化する現在のせとものや新たなせともの像を提示する産業観光という視点に立った展示展開。2階：せともの大量生産で活気があった時代の瀬戸をイメージし、まちの象徴である旧尾張瀬戸駅、陶房(モロ)、石炭窯、煙突などを配置。3階：千年以上の歴史がある瀬戸焼の変遷を全長30メートル以上の大パノラマで紹介。(参考HP： www.seto-cul.jp/setogura-museum)
	瀬戸蔵セラミックプラザ(瀬戸蔵内1階)	窯元組合のアンテナショップで組合の選定委員会が厳選した商品を展示販売。また、30小間ボックスギャラリーを常設し陶磁器の他にガラスやアクセサリー等の個性的な作家/窯元の作品を展示販売。(参考HP： www.seto-marutto.info/cgi-bin/data/kau/019.html)
3	新世紀工芸館	これまでの瀬戸のまちの特性を活かした上で、新世紀の産業・芸術・文化の発展を図ることを目的として開館。展示棟、交流棟、工房棟からなり、研修生の受け入れ、各種企画展、イベントなどに活用。(参考HP： www.seto-cul.jp/new-century)
4	瀬戸染付工芸館	「瀬戸染付」をテーマにした施設。「瀬戸染付」をはじめとするやきもの文化やロクロや絵付などの作業風景の公開、瀬戸染付の名品を展示。瀬戸の伝統産業を学べる施設。(参考HP： www.seto-cul.jp/sometsuke)
5	ノベルティ・こども創造館/ノベルティミュージアム	瀬戸・ノベルティ(陶磁器製の置物)の技術や文化を見学・体験できる施設。ミュージアム1F:「セト・ノベルティ」の名品展示。2F:「セト・ノベルティ」のバラエティ豊かな製品展示。(参考HP： www.seto-marutto.info/cgi-bin/data/miru/025.html)
6	窯垣の小径ギャラリー	江戸時代に建てられた旧窯元の屋敷を利用したギャラリー。主に洞町で作陶する若手作家の作品展示。新作展やお雛様展など、四季折々のイベントなども開催。(参考HP： www.seto-marutto.info/cgi-bin/data/gallery/033.html)
7	窯垣の小径資料館	明治後期の「本業焼」の窯元を改修した資料館。日本の近代タイル第一号といわれる「本業タイル」で装飾された浴室やトイレなどがある。(参考HP： www.seto-marutto.info/cgi-bin/data/gallery/034.html)
8	赤津焼会館	伝統工芸品「赤津焼」の展示。(参考HP： www.akazuyaki.jp/akazuyaki_kaikan.htm)
9	その他、民間の展示/物販等(例)招き猫ミュージアム	市内には、多数の民間のミュージアムや企業の展示スペースがあるが、招き猫ミュージアムでは、郷土玩具から骨董もの、日用雑貨まで、数千点の招き猫を展示しており、多数の来訪者がある。(参考HP： www.luckycat.ne.jp)
10	同上(例)ノベルティギャラリー ピアフ	1940～60年代にかけて瀬戸でつくられたアメリカ、ヨーロッパ向け輸出用ノベルティの展示販売。(参考HP： www.seto-marutto.info/cgi-bin/data/gallery/047.html .)

(2) 生産者組合に関連する建造物

表3 名古屋市における生産者組合関連建造物（例）

No.	施設名	展示内容など
1	名古屋陶磁器会館	昭和7年，名古屋陶磁器貿易商工同業組合の事務所として建設された建物。 1階展示室：戦前から戦後にかけて名古屋で上絵付加工され，世界を魅了した輸出用陶磁器作品の数々を展示。 (参考HP： nagoya-toujikaikan.org)
2	日本陶磁器センタービル	昭和9年，日本陶磁器工業組合連合会によって建設された建物（旧館）。外壁にスクラッチタイルが使われ，スチールの窓枠など，随所に当時の意匠の特徴がみられる。当時の陶磁器産業の隆盛を物語る建造物。 (参考HP： www.city.nagoya.jp/kankobunkakoryu/page/0000036284.html)

表4 瀬戸市における生産者組合関連建造物（例）

No.	施設名	展示内容など
1	瀬戸陶磁器会館 (愛知県陶磁器工業協同組合)	昭和10年，瀬戸陶磁器工業組合総合共同販売所兼事務所として完成。 ○愛陶工ギャラリー 展示室1：貸ギャラリー 展示室2・3 組合員製品展示。(参考HP： www.niwa-ae.com/ourworks/old_seto_toujiki.htm)
2	品野陶磁器センター (品野陶磁器工業協同組合)	瀬戸・品野地区の窯元の商品を中心に陶磁器の展示・販売を行う。 ○ギャラリー科野;陶芸家をはじめ，クラフト作家の作品発表と即売の場。 展示スペースは，組合員用とゲスト用に分かれる。 ○瀬戸陶芸協会常設ギャラリー (参考HP： www.toujiki.or.jp)
3	赤津焼会館（赤津焼工業協同組合）	伝統工芸品・赤津焼の展示販売。 (参考HP： www.akazuyaki.jp)

(3) 教育施設，試験研究機関

表5 瀬戸市（周辺）における教育施設，試験研究機関（例）

No.	施設名	展示内容など
1	瀬戸窯業技術センター	瀬戸地域を中心とする「せともの」に代表される和・洋食器やノベルティなどの窯業業界の技術支援機関として消費者ニーズの多様化，高級化に応え高品質で特色のある製品のデザイン開発や生産技術の向上で貢献するとともに，今後大きな成長が期待できるファインセラミックス研究開発にも積極的に取り組む研究施設。研究成果の紹介展示。 (参考HP： www.aichi-inst.jp/seto)
2	愛知県立窯業高等技術専門学校	職業能力開発促進法第16条に基づき愛知県が設置する職業能力開発施設で，陶磁器の製造やデザインの技能及び関連する基礎的な知識を付与し，陶磁器産業の明日を担う人材を育成。 (参考HP： www.pref.aichi.jp/soshiki/yogyo-senmonko/0000053657.html)
3	愛知県立瀬戸窯業高等学校	明治28年開校。開校時は「瀬戸陶器学校」で窯業科のみであったが，現在はセラミック科，デザイン科，電子機械，商業科の4つの専門学科で構成されている。 (参考HP： www.setoyogyo-h.aichi-c.ed.jp/data/top)

4	新世紀工芸館	これまでの瀬戸のまちの特性を活かした上で、新世紀の産業・芸術・文化の発展を図ることを目的として開館。展示棟，交流棟，工房棟からなり，研修生の受け入れ，各種企画展，イベントなどに活用。 (参考HP： www.seto-cul.jp/new-century)
5	愛知県立芸術大学 (長久手市)	デザイン／工芸科陶磁専攻 永い伝統と多様な技術力を有する瀬戸・常滑・美濃などの産地を背景とし，創作を展開できる恵まれた環境に立地。その地の利と充実した教育設備を生かし人の暮らしを見据えた陶磁の在り方を模索し，その創造に積極的に関与する人材の育成を目標とする。「用の美」を教育理念とし，暮らしの中の陶磁，建築陶磁など分野を超えて陶磁素材の可能性と表現の自由を探求すべく，陶磁の基本を積み上げながら学生個々能力を研鑽し次代をになう人材の教育に全力をあげている。 (参考HP： www.aichi-fam-u.ac.jp)

(4) その他関連資源（散策路など）

表6 名古屋市におけるその他関連資源（例）

No.	施設名	展示内容など
1	文化のみち榎木館	大正末期から昭和初期にかけて，輸出陶磁器商，井元為三郎によって建てられた邸宅。庭を囲むように配された洋館，和漢，茶室，その北側に立つ二棟の蔵で構成されており，手吹きによる歪みのある窓ガラスやさりげなく使われているステンドグラスなど，大正末の趣きある当時の姿をよく残した建物。展示室1（洋館）：パネルや資料などにより，名古屋陶磁産業の歴史を紹介。(参考HP： www.shumokukan.city.nagoya.jp)

表7 瀬戸市におけるその他関連資源（例）

No.	施設名	展示内容など
1	窯垣の小径	「窯垣」は，窯道具を積み上げて作った堀や石垣の呼称で，全国でも瀬戸でしか見られない景色。窯垣をつないだ約400mの細く曲がりくねった坂の多い路地が「窯垣の小径」。その昔は陶磁器を運ぶメインストリートで，現在でも窯屋さんの邸宅が立ち並ぶ。周辺には，窯元・ギャラリーが多くあり，せとものまのまちの風情が楽しめる。 (参考HP： www.seto-marutto.info/cgi-bin/data/miru/021.html)
2	暮らしっくストリート	「庶民的なぬくもりと暮らしを感じるルート」。日常の生活シーンを彩る“暮らし”をテーマとしたルートであり，緑日的な賑わいの演出とアンティークな雰囲気づくりをミックスした生活提案型散策路。道路は，グレーを基調とした半たわみ性舗装と黒御影石で，交差点は瀬戸製のやきものレンガを使用して整備されている。坂道は，自然の色目を基調とした脱色アスファルト舗装とやきものレンガを使用して整備されている。 (参考HP： www.city.seto.aichi.jp/docs/2010111000417/)
3	小狭間坂 (こばさまざか)	「眺望を楽しみ芸術を味わうルート」(1,370m)。中心市街地を見渡す眺望機能を活かすほか，やきものに限らず茶道，工芸，絵画など多様なジャンルの芸術に触れられる時空間を提供する散策路。道路は自然の色目を基調とした脱色アスファルト舗装と黒御影石で整備し，坂道は歩きやすさを重視した茶色系の滑り止め塗装，交差点は瀬戸製のやきものレンガを使用して整備。坂道の柵には，四季の草木を描いた染付タイルがはめ込まれている。 (参考HP： www.city.seto.aichi.jp/docs/2010111000417/)

4	洞街道 (ほらかいどう)	「歴史の深さを味わうルート」(1,400m) 瀬戸のやきものの伝統と文化が色濃く残る洞地区。窯道具で飾られた散策路の「窯垣の小径」や「窯垣の小径資料館」の味わいのあるたたずまいや施設が拠点となる。道路は自然の色目を基調とした脱色アスファルト舗装と瀬戸製のやきものレンガで整備し、交差点にもやきものレンガが使用されている。川の上に張り出した歩道部分には、茶色系の滑り止め塗装、陶磁器製の歩車道境界ブロック、柵には本業タイルが込まれている。 (参考HP：www.city.seto.aichi.jp/docs/2010111000417/)
5	炎護路(えんごろ)	「伝統を訪ね技を磨くルート」。やきものと関係が深く歴史のある寺社から、窯元ゾーン、宮前公園を結ぶ坂道であり、窯道具で飾られた垣根を鑑賞しながら伝統的な工芸技術の伝承を感じる散策路。 (参考HP：www.city.seto.aichi.jp/docs/2010111000417/)

2.2 無形の文化・観光資源

近代輸出陶磁器に関連する技術／技法などに人へ帰属する文化的価値である「人的資源」については、別途、論文で整理しているが⁴⁾、職人の高齢化が進み、生業の中での伝承が困難なこともあり、継承環境は依然、厳しいものがある。そのような中で、技術や技法の伝承、あるいはその文化的側面を評価して伝承を試みる活動も芽生えてきた。以下、名古屋と瀬戸における陶磁器文化の伝承・活用に関係する新たな活動団体を整理しておく。

表8 文化の伝承・活用における新たな組織(例)

No.	施設名	展示内容など
1	瀬戸ノベルティ文化保存研究会・瀬戸ノベルティ倶楽部	“瀬戸の華・ノベルティ”の保存と創造的継承に正面から取り組む会。瀬戸市末広町アーケード街に活動。拠点『瀬戸ノベルティ倶楽部』を開設。ノベルティ展示(一部展示販売)している。 (参考HP: setonovelty.blog65.fc2.com)
2	なごや凸盛り隊	「名古屋絵付け」の「技」をまもりつたえる活動に取り組む同士のグループ(2013年結成)。名古屋陶磁器会館などにおいて、名古屋絵付けの伝統技法の一つである「凸盛り」を中心に、職人技の創造的継承を目指す活動を行っている(「凸盛り“若冲プロジェクト”」(文化庁補助事業)など)。
3	やきもの産地交流・連携推進協議会	東海地域に広がる陶磁器産地を抱える6つの自治体(瀬戸市・常滑市・瑞浪市・土岐市・多治見市・四日市市)で構成。共同でのPRや展示などを行っている(「国際陶磁器フェスティバル美濃‘17(2017年)での共同PR・パネル展示など」)。

3. 文化・観光資源を活用した交流と創造活動への道筋

本稿では、近代における陶磁器産業で繋がっていた瀬戸市と名古屋市の関係で生まれた諸資源を、文化・観光資源として捉え直し、その活用を前提となる資源の整理を試みた。ここで、それらの評価を行うとともに、今後の可能性を展望してみたい。まず、瀬戸市では、陶磁器産業の歴史を今日まで継承している。従って、その比率は低下したとはいえ、市内には陶磁器に関する多くの生産・流通・小売り機能があり、現在でも、陶磁器のまちとしての性格を有している。同時に、

それらを文化資源として評価し、観光交流に繋げていく試みとして、市内各所に「やきもの」をテーマとした散策路があることが分かった。こうした資源のネットワークは、市全体があたかも一つのミュージアムであるように見立て、観光交流に繋げる「政策」として「まるっとミュージアム」と呼ばれており、産業としてのみならず文化や観光面でも陶磁器に関連する資源を活用する方向が窺える。同時に、瀬戸市では、2005年に隣接する「愛知青少年公園」で開催された「愛・地球博」を契機とした産地の連携事業も行われるなど産地間の交流が活発化している。こうした流れは、さらに、2017年4月28日に「日本遺産」への認定へと繋がっていく⁵⁾。今後は、さらにこれらのインパクトを受け止めた広域的な観光連携の模索も必要になる。

また、六古窯に比べれば、時代ははるかに新しいが、近代産業としての輸出陶磁器を対象とした広域的な交流／連携を検討することも、文化観光推進上の厚みを増すこととなる。そのため、今回は、地理的には近接する名古屋との関係、また、時代的には「近代」という時代の中で、主に輸出陶磁器によって構築された関係性の中で生まれた文化・観光資源を活かすことに焦点を当てた。近代産業であるが故に、建造物としての資源や作品も多く残されている。加えて、人的資源となる職人の技も伝えることができる。

一方、名古屋市の陶磁器産業は、(株)ノリタケカンパニーリミテッドを初めとする企業の中で受け継がれ、「ノリタケの森」などの文化施設も整備されている。しかし、近代産業として開花した時期において、東区界限などを中心に集積した生産・流通機能は、今日では、その手がかりとなる資源も減少傾向にある。こうした中で、近年、この界限は、「文化のみち」として、陶磁器や自動車など近代化産業に縁のある資源集積を活かした面的な回遊性を目指すようになった。そして、毎年11月3日には資源をまわるイベントである「歩こう！ 文化のみち」も行われている。さらに、2017年10月1日には、明治期以降の輸出陶磁器を展示する「横山美術館」がオープンするなど、新たな文化・観光資源の蓄積もみられるようになった。

こうした流れを受けて、近代における輸出陶磁器が改めて注目／評価されている。同時に、近代輸出陶磁器やその伝統の技などを活かした広域的な産業観光の推進が、新たな文化基盤を形成していく可能性もある。それが、将来的には、創造的な活動へも刺激を与え、やがては新たな生業の創造にもつながっていくのではないだろうか。そのためには、まず、新たな「物語」を生み出し、広域的な産業観光を実現することが必要となるであろう。

おわりに

本稿で整理した文化・観光資源はごく一例に過ぎないが、こうした多様な資源が名古屋と瀬戸には多数存在することが分かった。勿論、それぞれの市に施設が存在するだけで、広域的な交流が生まれる訳ではない。そこには、歴史を軸とした「物語」が必要であり、それを現代において「解釈」することも求められるであろう。こうして、それらを有機的に結びつけることができれば、相乗効果を発揮することも期待できる。

連綿とした陶磁器産業のまちである瀬戸が、名古屋との交流によって新たな創造活動が生まれ、

一方、名古屋における暮らしにおいても、その質的な向上を齎すような関係性の構築について、今後は、ここで整理した資源や検証した方向性を元にさらに議論を深めていくこととしたい。

註

- 1) その理由としては、二つの側面が考えられ、一つは、瀬戸や美濃で作られた製品、半製品、素地などを運び、上絵付、仕上げ、検品、梱包を経て、堀川から舳で運び名古屋港へと運搬する結節点であること、二つには、武家屋敷の跡地などまとまった敷地の確保が可能であるという土地利用上の優位性である。
- 2) 一部、瀬戸市に隣接する長久手市にある施設を含む。
- 3) 文化資源学会HP (www.bunkasigen.jp)
- 4) 古池嘉和(2013)『名古屋陶磁に関する基礎データ』芸術文化紀要第7巻, 富山大学, にて名古屋の人的資源について整理している。
- 5) 日本遺産 (Japan Heritage) とは、「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリー」を認定するものであり、日本に古くからある六つの古窯を有する自治体「備前市(岡山県)・越前町(福井県)・瀬戸市/常滑市(愛知県)・甲賀市(滋賀県)・篠山市(兵庫県)」を申請団体とする「きっと恋する六古窯—日本生まれ日本育ちのやきもの産地—」というストーリーが認定された。

参考文献

- 古池嘉和(2013)「名古屋陶磁に関する基礎データ」『芸術文化紀要(第7巻)』富山大学
- 鈴木俊昭(2012)「世界へ羽ばたいた名古屋陶磁」『界限創世やきものの未来へ』名古屋文化遺産活用実行委員会
- 田村哲(2012)「文化のみち」と「やきもの街道」その歴史的背景、瀬戸から名古屋へ素晴らしい産業文化財について」『界限創世やきものの未来へ』名古屋文化遺産活用実行委員会
- 服部文孝(1997)「セト・ノベルティの歴史」『せとものフェスタ '97セト・ノベルティ—世界へ夢を贈るやきもの—』大せともの祭協賛会